

中部の

エネルギーを 築いた

人々

中濃地域に電気文明をもたらした事業家
武藤助右衛門

生き立ち・家業・奥濃鉱業

武藤助右衛門は安政6年2月、岐阜県武儀郡生櫛村の西部市兵衛の次男（幼名虎吉）として生まれた。明治12年7月、20歳で武藤家の養子となり、明治28年10月、家督を相続し助右衛門を襲名した。生家では、戸長代理、郡役所の書記を務めた。明治31年上有知村村会議員、町制施工後は美濃町町会議員に当選し大正2年まで12年間勤め、明治38年に武儀郡郡会議員、大正5年には美濃町商工会会長となった。

武藤家は代々金物販売業を営んでいたが、明治35年9月、郡



畑佐鉱山(出典：『明宝村史通史編下巻』)

上郡奥明方村
畑佐の鉱山(銅、
銀などを産出)



武藤助右衛門

を開発する奥濃鉱業を起し社長となった。自家用発電所(100kW)を設けて坑内の灯火や鉱石運搬用索道に使用し、武藤が後に電気事業に進むきっかけとなった。明治29年6月には、上有知銀行(後の美濃銀行)を創立し、終生その取締役であった。

地方開発を目ざし板取川電気を創設

地方の発展に電力利用の重要性を認識し、武藤助右衛門外2人は明治42年7月、板取川電気を創立し(資本金6万円)、武藤は社長に就任した。同年11月、長良川支流の板取川に安毛発電所(113kW、武儀郡安曇村大字安毛)を計画し、「発電興起、経営日夜惨憺を極め、自ら工を督し衆を励まし矻々相勞して」完成板取川電気株式会社第二発電所之碑)、明治43年11月に運転を開始、



安毛発電所跡

電灯電力の供給区域は美濃町、関町、加茂郡川辺町、下麻生町に及んだ。明治44年2月、岐阜・美濃間を結ぶ岐阜県2番目の電気鉄道的美

濃電気軌道は、この電力を利用(150馬力)して開通した。同発電所は昭和10年6月に廃止され、その跡は井ノ面発電所の沈砂池となっている。

岩窟内に建設された井ノ面発電所

供給区域の拡大や需要の増加によって、第2発電所として井ノ面発電所が計画された。安毛発電所の水路は土砂が堆積し所要の出力が出なくなったため、水路から分水して落差の大きい井ノ面発電所(出力300kW)を建設し、両者併用して供給力増加をはかった。発電所の建設地点(美濃町安毛字井ノ面)は、山の岸壁が長良川に迫り、用地(94平方 m^2)の確保が難しいため、岩盤をくり抜いてその中に水車・発電機を設置したもので、岩窟内に設けられたわが国初の発電所である。土木技師永田喜之助の設計を基に、スイス人ハトマンや京都大学の大藤高彦、青柳栄司両教授の指導

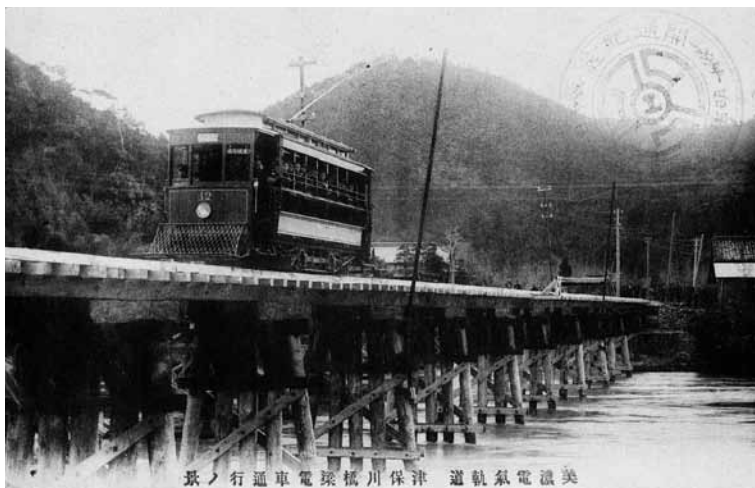


井ノ面発電所外観

を得て建設され、大正3年1月に運転を開始した。発電所入り口の左手には「板取川電気株式会社第二発電所之碑」が立てられ、創業者武藤助右衛門の功を称えている。

事業家武藤助右衛門

武藤は卓識明敏、起業家精神に溢れた人物で、家業武藤商店、奥濃鉱業、板取川電気以外にも数多くの事業を起こし地域の発展に貢献した。板取川電気の関連会社として犬山電灯、可兒川電気、中濃電気の3社を設立したほか、神淵川電気、美濃電力、東濃電化、美濃電化肥料、美濃電気軌道(大正7年5月から沿線に電気事業を兼営)、美濃工業、八幡産業、日本抄紙、美濃金融商会など武儀郡、加茂郡を中心に各種の事業に関わり社長や役員となった。しかし、大正10年8月に板取



美濃電気軌道 津保川橋梁通過中の電車(名鉄資料館提供)

美濃電気軌道 津保川橋梁通過中の電車(名鉄資料館提供)

川電気を東邦電力に譲渡したほか、順次電気事業を手放し、晩年はその資金で美濃救護院を設立、社会事業に尽した。大正14年9月、67歳で永眠した。(浅野 伸一)